
アワプレイス

伊倉入夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アワプレイス

【Nコード】

N9833V

【作者名】

伊倉入夏

【あらすじ】

天道島。そこは東京から船で25時間のところに位置する島。今年から高校一年生となった晴が引越してきた島。晴を含めて高校生が五人しかいない島。そして、内地のどこよりも温もりを感じられる島。これは、そんな島に住む晴たちの、日常の物語。

ブローグみたいなのと、サイコロ。

スニーカーを履いた足が固いコンクリートを踏みしめた。

実に、25時間ぶりの地面だった。

東京から船に乗って一泊弱、晴^{せい}がやって来たところは日本の果ての果ての、小さな島。

名を、天道島という。

うーん、と大きな伸びをする。深く吸い込んだ息は海独特の潮臭さがあつた。

東京と比べるとだいぶ暑い。まだ四月なのに、Tシャツの上にシヤツ一枚羽織るだけでも充分なくらいだ。事前にネットで調べたら、年間平均気温が23度もあつた。

晴に続いて後ろから家族が出てくるので邪魔にならないよう脇によける。

見上げると、年中無休の太陽は今日も燦々と照りつける。心なしか、日光も東京のそれより強い。眩しくて、晴は手をかざして光を遮る。

そのまま視点をずらしていくと、遠くに山の陰が見える。あれがこの島の最高峰、天道山。これも事前に調べた。

防波堤を、岸に向かって歩き出す。バックから聞こえる、小豆を転がしたようなさざ波のBGMが心地いい。

煌々と輝く太陽に、緑深い山。それから東京湾とは水の透度が違う、青い海。

都会の雑踏の中では決して見るできない、本物の大自然の中に、今自分はいるのだ。

引越しの荷物は届いただろうか。業者は自分たちのより一つ先

の便のはず。

晴は高鳴る気持ちに従うまま、軽やかな足取りでステップを刻みだした。

ここから、なんだ。

ここから、新しい生活が、ひいては青春のど真ん中とも呼ぶべき高校生活が、始まるんだ。

「……………ヒマ」

不機嫌顔の灯が寝っ転がって脇腹を掻いた。

「そうですねえ」

まったく、晴。暇なことはいいことだと思う。貧乏暇なしのこ
とわざの裏をかけばむしろ暇であるということはこの上ない贅沢で
ある、というのが彼の持論。

「セイ、なんかおもしろい話」

が、自分の裕福さを理解できない灯はそんなことを要求した。

「無理ですよ」

芸人じゃあるまいし、と晴は灯を見返して肩をすくめた。全身汲
まなく小麦色の灯はＴシャツをみつともなく乱して腹を出していた。
ちよつと目を逸らしたくなる。

灯は晴を男子と思っていない節があるのでこいうのは大変困る。
辰巳たつみがいればある程度ちゃんとするし、新芽しんめがいれば注意してくれ
るのだが、今その二人は不在。教師に呼ばれてるのだろうか。

ここにいるのは晴と灯と、さつきから無言を決め込んでいる煌ひかるだ
けだ。

「むー、しょうがないな」

灯は起き上がってなにやら引き出しをこそごそし始めた。厚紙と

ペンとハサミなんか使って、なにをするつもりだろう。

ところで、ここは学校の談話室だ。談話室とはいっても名前だけで、現在はもっぱら天道高校内唯一クラブ『遊部^{あそぶ}』の部室として活動スペースを提供してくれている。

たいていのものはここで補える。ソファー、じゅうたんはもちろん、コンロや冷蔵庫まであるので、あとは洗濯機さえ設置すればこの空間で生活を完結できる。

ちなみに、なぜ部活が遊部しかないかというと、単に生徒数が五人しかいなくて五人が全員遊部に所属しているから。

「よし、できた！」

不意に灯が叫び、悪意のある笑顔を晴に向けた。

「な、なんですか？」

めちやくちや嫌な予感がする。しかしこう問わなければならない。悲しき後輩の務めなりけり（詠嘆形）。

「見る！」

ちっちゃな手に乗ったそれは、サイコロ。ただ、面に数字ではない文字が記されている。悲しかった出来事、とか自分の中で流っているもの、とか。

「まさかこれ振って当たったお題を、」

……話せてことですよねえ、間違いなく。

「そうだ、やれ！」

先輩の命令は絶対！ と灯は胸を張る。前々から思っていたが高校のこの年功序列システムはどうにも不満がある。たった一年の差なんて社会に出たら無に等しいぞこんちくしょう。

「ヒカルにやらせてくださいよ」

なんの辺哲もないただの椅子（一応煌専用ということになっている）に座ってぬぐんと無表情の煌を指差す。

「いや、あの子には無理でしょ」

そこは灯もわかっているらしい。

煌自身は自分のことなど話題にも上がってない、といった様子で、

相変わらずぬぐんとしているが。

「僕にも無理ですよ」

「アーイビリーブ、」

パチリ、とウインク。

「ユー」

いや信じられても困りますって。

「そもそも僕は自分から話をするの苦手なんですけどね」

とかいいつつも、なんだかんだでサイコロを握ってしまう晴だった。

「お、やる気じゃん。ヒカル！ セイがおもしろい話するぞ！」

なんて灯が呼びかけると、煌はマイシートを離れ、とことこと晴の足元までやって来る。

「話、聞きたい」

無機質な声だった。

本当にそう思ってるのかよ？ と疑いたくもなるが、これが煌の普段の話し方。

「じゃ、いきますよ」

紙のサイコロを転がす。

即席で、かつ厚紙製だからなのか、サイコロは思ったほど転がらず、すぐに一つの面を上にして止まった。

三人で頭を寄せて、そこにある文字を確認する。

怖い話

と、書かれてあった。

三人は三様の反応を見せた。

晴はほっと胸を撫で下ろした。ちょうどよく、怖い話なら持ち合わせがあった。それにこのジャンルならハードル低いから多少滑っ

てもノリでなんとかなりそうだ。

灯は、

「うつわあー、なんかベタなヤツ来ちゃったよ、つまんねえー。『自分の恋愛観と子ども作るといいう行為の考察』とか当たればよかったのに」

「……どんな地雷仕込んでるんですかあんたは」

当たったのが『怖い話』で本当によかった。

最後に煌の方を見れば、やはり彼女は無表情のままだった。ところが、

「私、やっぱりいい」

くるり、と方向転換してダッシュで逃げ出した。

「逃がさん！」

しかし、運動能力では灯が数枚上手で、扉に着く前に捕獲されてしまった。

「んむー！ んむー！」

なんとか逃れようとするが、灯のホールドは相当強く、華奢な煌などが敵うはずもなかった。

「一緒に聞こうよヒカルちゃん。それともビビってるのかな？もしかして、ヒカルちゃんは怖がりなんでちゅか？」

もちろん、灯は今の行動でそう勘づいておきながら尋ねているのだ。つくづくタチが悪い。

「怖く、なんか、ないっ」

口にあてがわれた灯の手をなんとか払いのけて、煌は息も絶え絶えに反論した。

顔が真っ赤になって、目の端にはうつすら涙がにじんでいる状態でいわれてもまったく説得力がない。

「じゃあ一緒に聞こうかつ」

灯にとって、こんな煌をいじめるときが至福の時間なんだとか。曰く、ちょっかわいい！ だとか。

煌はしぶしぶうなずいて晴のところに帰ってきた。こんなふうに

妙なところでプライドを発揮するものだから先輩たちもおもしろがるのだが。

「あ、どうせなら部屋暗くしようか」

ひらめくとすぐに、灯は電気を消してカーテンまで閉めた。すると、昼間とはいえなかなか暗くなった。

びくつ、と震えた煌が晴の袖にしがみついた。ぶるぶるしているし、本気で怖がっているみたいだ。普段が鉄仮面だけに、こんなふうにされるとドキツとする。

「さ、話さない！」

灯もこんなにかわいい煌が見られて満足そうだった。

「は、はい」

隣の煌が、話さないで話さないで話さないで……、と目で訴えてくるが、こればかりはどうしようもない。先輩の命令は絶対なのです。

「えっと、これは去年のお盆のことだったんですけど。夜、なんか変な音で起きたんです。耳を澄ますと、カリカリ、カリカリってなにかをひっかくような音がして。窓から聞こえてくるようでした。時期も時期だったんでこれちょっとまずいんじゃないかなあって思いながらも意を決して窓を開いたんですけど。そしたら……」

ここで間を作る。聞いている人に想像させる余地を与えるのだ。怖い話はそれを聞いてあれこれ想像するから怖いのだ、となにかで聞いたことがある。

「そしたら？」

すでに灯は晴の話術の虜となっていた。彼女のドキドキが手に取るように感じられる。

煌はこの世の終わりみたいに絶望的な顔で首を振った。目がウルウルしていて、こんな煌はとてもレアだ。

「そしたら……」

たっぷりたっぷり間を作って……

「セミでした」

ここで落とす。

きよとん、と灯も煌も目を丸くした。

「なんか、窓にセミが引っかかっていたみたいで、開けたら飛んでっちゃんいました。それからカリカリって音も止んだので、十中八九正体はセミでした」

そして晴は微笑む。自分でもなんだが、なかなかよくできたと思う。もしかしたら自分こういうの向いてるかも。

などという、晴の自画自賛を、

「……つまんな」

灯が一吹きで消し飛ばした。

「ったくよおー、誰がそんな話しろつつたよおー。あたしや背筋が凍るような怖い話をしろつつたのによおー。カテゴリーエラーだっつーの」

すっかり興ざめ、といった感じで灯は電気をつけに行った。

「そ、そんな……」

晴の自信、めった打ち。ガックリとうなだれた彼の傍らで、

「よかった、怖い話じゃなくて」

珍しく煌が顔を綻ばせた。

それを見て、自然と晴も表情筋が弛んでくる。灯のように自分の話をつまらないという一方で、煌のように笑顔になってくれる人もいる。

やっぱり僕の話術も捨てたもんじゃないな、と晴は思った。

ヒカル。

晴は煌と同じ学年なので、学校では登校してから下校するまで煌と一緒にいる。

「……あれ？」

部室に入ろうとしてドアノブをひねったが、困ったことにドアが開かない。

「鍵、かかってる？」

「うん」

うなずくと、煌はカバンから鍵を取り出してカチャリと差し込んだ。

「ヒカル、部室の鍵持ってたの？」

こくり。煌は首肯する。

「念のため、部員は全員持ってるって、新芽先輩が」

「ふうん、だったらおかしいな、僕もらってないんだけど？」

「……………」

「や、やめるよ、そんなかわいそうなものを見る目で僕を見るなよ」
そう、きつと新芽が忘れていたに違いない。会ったときに確認しよう。

部室に入るなり、煌は一直線にマイシートに向かって、ちょこんと座った。これがもう遊部の風景となりつつある。

対して晴はぶらぶらと行き場をさ迷った挙げ句、じゅうたんに荷物を下ろして体はソファに預けた。

このソファ、上級生がいるときは彼らに占領されてしまったため、今回が晴のソファデビューだったりする。ちよっとドキドキ。

さて。そのまましばらくのほほんとしていたわけだが、

(どうしよう……)

穏やかな空気とは裏腹、晴は内心焦っていた。

(……話すことが……ない)

思い返せば、煌と四六時中共に在るとはいえ、完全に二人きりになるのは初めてだった。

ほとんどの時間は授業だったし、休み時間の煌は予習に専念していたためそつとしておこうと思っていた。昼休みも部室でみんな集まって食べるので……。

(なんてこった……)

今さらながら、煌は部員の中でまるつきり陰だったことに気がついた。

しょうがないので、この数週間で把握した彼女のひとりとナリから上手い具合に興味を示してくれそうな話題を選ぶとする。

ヒカル。本名藍星煌。あいぼし高一、15歳。彼女も晴と同じく今年から

この島にやって来た人。色白、華奢。それから、無口。あ、あと怖い話が苦手というのも先日発覚したな。あとは……

……。

……終わった。これしか、今の彼女の情報を持っていなかった。

さて、ここからどう煌が喜びそうなテーマを発掘しろというのだ？ 結局話すのは諦めかけたところ、煌の方にアクションが起こった。

「なにやってるんだ？」

尋ねると、

「宿題」

簡潔な答えが返ってきた。

「ぼ、僕もやるよっ」

これ幸いとばかりに、晴もしっぱを振って煌のところへ行く。

「今日の数学の宿題とか難しそうだしな。教え合った方が効率いい

……」

ぶつくさといらん理屈をこねまわし、煌のノートを覗き見て晴はぎよつとした。

「なんじゃあ、こりゃあ……！？」

それはもうどこぞの刑事の死に際みたいになってしまっただけに。

「どうかした？」

どうかしたもくそもない。難解だったはずの今日の宿題を、ぱっぱと解いていつてしまっただけから。

こうして話している間にもまた一問。もはやノールック。

「なんでそんなに楽々と……？」

よく見るとノートの隅っこにかわいいキャラクターのイラストが……ってそんなことはどうでもいい。字も彼女の平淡な性格からは想像できないほど丸い。いや、本当にどうでもいいんだけどさ。

「問題？ 別に、これそんなに難しくもないし」

だとしたら先ほど難しいといった自分はなんなんだろうか。

「で、でも途中式とかは？」

「いらないでしょ」

さらっと答える煌。晴の自信がどんどん暴落中。リーマンショックもびつくりな勢いだよ。

「だ、だってこれ途中式ないと全然つながらないじゃん！？」

「一足す一は？」

「え？ 二だけど」

それがどうした、と問う前に、

「そういうこと」

煌が答えを提示した。

要はそういうことらしい。煌にとっては難解な因数分解も小学生が声を揃えて答えを叫ぶ算数と同じものだそうだ。

簡単にいえば、煌と晴では次元がまったく違うってこと。

煌はまた宿題に意識を戻した。そうなるともはやその手は淀みない。むしろ、速すぎる思考速度に手がついていけない。手で一つの問題の答えを書きながら、目はすでに次の問題を捉えている。そ

りや変な丸文字にもなるだろう。

「これ、写してもいい!？」

「どうぞ」

晴は煌の隣に座って鬼気迫る速度で彼女の筆跡を追い始めた。

これからは、宿題は部活の時間に煌のを写させてもらおう、と決めた。

藍星煌は学業優秀らしい。今日は彼女の新しい個性を知った。

この調子で、彼女や他のみんなのいろいろなところを知っていけたらいいな。と、晴は思った。

バイクと回想。

朝。

晴が玄関で立っていると、のどかな道の向こうから、風景におかしいほど似合っていないごついバイクがぶるんぶるんいいながらやって来た。

「ヘイ！ セイ！」

ジャ〜ンプ！ と叫んで彼女は晴の目の前でバイクを急停車させた。

「よお、セイ！」

「おはようございます」

半ヘルの彼女は、日野灯。ガン黒小柄、バイクに乗るといふよりは乗せられているといった方が適切な、いつも晴にムチャ振りをかますXS少女。一応、先輩。

「ほら、乗れよ」

ヘルメットを投げ渡し、灯は後部座席を叩く。

「失礼します。今日も」

晴はカバンをかけ直し、お言葉に甘えてバイクに跨がる。

「しっかりとつかまっとけよ」

灯はエンジンを噴かした。

その腰へ、そっと手を伸ばす。細い。つかまっていなと振り落とされてしまうからこうせざるをえないのだが、何度やってもこの格好は気恥ずかしい。せめて男女ポジションが逆だったら、まだいくぶんか見栄えよかったのに。

なにはともあれ、レッツゴー。向かう先は学校。

なぜ登校にバイクを使っているのかというと、家から学校までが

遠いから。

晴や灯の家は海の近くに建っているのに対し、学校は山の上なのだ。なんでそんな不便なところにあるのか、と疑問に思っても実際にあるのだからしかたない。

信号待ちで停車すると、道行く人があいさつをしてくれ、晴と灯も返す。

島が小さいためか、島民はみんな仲がいい。晴も今や海側に住む島民ならほとんどの人と知り合いだ。

都会の冷めた近所関係に比べ、この島はみんなが温かい。

天道島に引越して、一番初めに晴に温かくしてくれたのは、灯だった。

それは転校初日のこと。学校までもとても徒歩で行ける距離ではないと知り、まともな交通機関もなく、さらに母は車の運転ができなくて、参ってしまったときも、

「ヘイ、転校生！」

なんて叫びながらバイクで颯爽と現れたのが灯だった。

灯は晴と家が近く、彼らが引越して来たことを知り、かつ登校に困るだろうということを察してくれたらしい。

「後ろ、乗ってきな」

と、ニヤリとはにかんだ彼女は格好よかった。自分が女だったらきつと惚れていただろう。

それ以来、灯は欠かすことなく晴の家に寄って、彼を乗せてくれる。

登下校だけじゃない。その他さまざまな面でも、島生活に戸惑う晴を灯は姉のように優しく導いてくれた。

実は灯、結構面倒見がいいひとだった。チビだけど。いつも晴のこと振り回してばっかだけど。

バイクは山道を行き、大きなカーブを車体を傾けながら走行する。
「灯先輩」

どうせ聞こえてないだろう。晴はそつとささやく。

「先輩って、何気に奥ゆかしいひとだったりするんですね」

なんて、面と向かっていえないけど。調子に乗らせたくないし。グラツ、と唐突にバイクが揺れた。

なんとかじゃねーよ！ と灯が怒鳴ったが、なんとかの部分聞き取れなかった。ひよつとして、今のが聞こえていたのだろうか。とにかく、この揺れですつ飛ばされないよう、さつきより強めにしがみついた。

灯は意外に腹筋が強かった。

学校に着き、灯が置き場にバイクを止めているのを見守っていると、原付に乗った煌が登校してきた。

「よっ、ヒカル！」

灯が手を挙げてあいさつしようとして、バイクが倒れそうになる。「おはようございます」

煌はぬぐんと無表情で原付を灯のバイクの二つ隣に駐車した。

「原付持ってたんだ」

煌にはまったく似合わない組み合わせなので、晴はちょっと驚く。まあ、徒歩や自転車で登校するのもないけど。

「うん」

ヘルメットを外した煌は、髪の毛を手ぐしでいじる。きれいな黒髪ストリート。

…… たしか煌もまだ15歳だったはずんだけど。

「ああ、ここは特別に15歳でも免許が取れるようになってるんだ。じゃなきゃ学校に通えないだろ」

灯が捕捉する。

「そうなんですか」

だったら、この優しい先輩にいつまでも甘えて迷惑かけたくないし、自分も早いとこ免許取りたいなあ、と晴は思った。

一単位の攻防。

放課後、いつもと同じように晴と煌は部室にいた。

煌は彼女の専用シートに座り、宿題をカキカキ。その横で晴が彼女の解答をカキカキ。丸写し。

外から雀のねず鳴きがチュンチュンと、開放した窓越しに聞こえる。

校舎のすぐ隣には木がうつそうと繁っているの、そのうちのどこかに止まっているのだろう。

平穏だなあ、と晴は一旦手を止めてあくびをした。いつもなにかに追われてせわしなかった東京に比べ、ここはのどかでいいところだ。眠くなる。眠くなる……

……………。

チクツ。

「痛っ」

顔をしかめて煌を見ると、彼女は無言でノートを示している。自分のと見比べると、煌の方はだいぶ先まで進んでいた。

「僕、寝てた？」

尋ねると、煌はこくっ、とうなずく。

どうやら気づかぬ間に眠りこけてしまっていたみたいだ。東京では居眠りなんてめったになかったのに、恐るべしネイチャーパワー。再び、宿題に意識を戻す。煌に似合わない丸文字をひたすらに追っていく。

「シャアアアア！」

突然、平穩は破られた。

「ヒカルう！」

人が飛び込んで来たのだ。……窓から。ここ二階なんですけど。

「またどうしてそんなにアクロバットなマネを……」

あいさつ代わりに、晴は呻いた。

「いやはははは！ 実はな、先生に追われてるんだなこれが！ 早くも留年の危機なんだとよ！」

「まだ四月なのにですか」

頭を無造作に掻き、自らの不名誉を高笑いで宣言した彼は、海堂辰巳。

格好からして個性的な人物である。辰巳は、いつでもどこでも甚平を着ている。今この瞬間も。

一応この学校は、制服と私服、どちらでも好きな方を着ていいことになってはいるが、灯と辰巳の二年生コンビは制服という概念がそもそもないらしい。

「あ、じゅうたんに土足で上がらないでくださいよ。てか今どうやって入って来たんですか？」

「木から飛び移った」

なんでもないように辰巳は答える。近くに植わっているとはいえ、木は校舎から二メートルは離れていたはずだが。

「辰巳先輩のアクティブさにはたびたび驚かされますが、今回の以前にも増して超人ですね」

晴は呆れた。落ちたら骨の一本や二本いつでもおかしくないうのに、この人はよくやる。

辰巳は大柄の男子である。四月測った晴の身長が165センチ（……いやすいません盛りました、本当は163.8センチです）で向かい合ったときの首の角度から概算しても180は軽く越えている。

その上、筋肉質である。この前文字通り『手作り』でリングジュースを作っていたので、まあそういうことだ。

さらに百メートルを十秒台で駆け抜ける驚愕の瞬発力まで兼ね備え、スポーツという土俵において彼に敵う者はそうそういない。少なくとも晴ごときなら小指一本でけちょんけちょんにできる。

しかし、彼にも弱点はある。

「なにか用ですか？」

遅ればせながら、煌が返事をした。

「おお、そうだそうだ、危うく忘れるところだった」

と、辰巳は教科書とノートを、これからデュエルでもするように片手に持った。

「……どこから出したんですか」

晴のツツコミはスルー。

辰巳は堂々と胸を張った。

「さて、ヒカル。俺の宿題を手伝ってはくれないか？」

そう、海堂辰巳は致命的に

バカ

なのだ。

「嫌です」

ザシュッ。煌は袈裟斬りに一刀両断。

「ぐっ、な、なぜだ！ セイのは手伝っているではないか！」

辰巳は見るからに狼狽していた。

対して煌は、

「セイは、特別」

なでなで。晴の頭を撫でる。

そんなこといわれてかつされては、晴の顔は熱を帯びて、つまりめちゃくちゃ恥ずかしい。

「へー、お前セイのこと好きなんだ！ やーい、やーい！」

あんたは小学生ですか。

「いや、僕の推測だとこれは恋愛感情とかではなく母性本能みたいなものではないでしょうか。僕はチビですし結構虚弱体質なので守ってあげたくなるというか、きつと灯先輩が毎日僕をニツケしてくれるのも、ええ、そういう理由なんでしょう」

晴は照れると饒舌になる体質だった。新しい自分発見。

「セイ、好き。かわいいから」

そんなに僕を悶えさせたいか。

「はーん、やっぱりな！ 島中に広めてやるぜこの噂！ ひゃっはー！」

なぜか辰巳が短パンにランニングシャツで麦わら帽子かぶって鼻水垂らしているように見える。

「ええ、彼女はノートの隅にキャラクターとか描くくらいかわいいもの好きですから人一倍そういうのが強いのでしょうね。彼女をカクレクマノミとたとえるならばさしずめ僕は二〇でしょう」

晴自身もクレイジーだった。

混沌を破って、音楽が流れた。とある萌え萌え系アイドルグルーブの最新曲だ。

「はい、もしもし」

煌の電話だった。

「ええ、はい……辰巳先輩なら部室にいますが……」
突如、部室の扉が蹴破られた。

「おら辰巳い！ 逃がさねえぞー！ お前連行したらあたしにー単位なんだからなあー、あっはっはー！」

灯、突入。さらなる力オスの予感。

「ぐっ、この、教師の手先め！ 知っているか！？ その二人、付き合ってやがるんだぜ！」

煌と晴を指し示す。

「いやいや、彼女はたしかに僕を好きだといいましたがそれはあくまでも保護対象としてという意味で決して付き合つとかそういう恋

愛ものではなくて彼女をネ〇とたとえるならばさしずめ僕はパト〇
ツシュであり――」

「うるせえっ！」

「へぶっ」

バキッ、と灯の強烈な一撃が晴を無理矢理黙らせる。

「げっへっへ、覚悟しろよ一単位！」

彼女の顔は凶悪犯そのものだ。

たしか、灯もこういうところの一単位が重要になるほどのバカだ
った。

「ちくしょう、こうなりや三十六計逃げるに如かず！ 俺は逃げる
ぜあばよ！」

辰巳は甚平の袖を翻すと、なんの躊躇もなく入ってきた窓から飛
び降りた。

「あっ、こら待て一単位！」

続けて灯までも窓から飛び出し、木につかまってするすると下っ
ていった。

ここ、二階なんですけどね。念のためもう一度。

部室を、嵐の過ぎ去った静けさが包み込む。

「大丈夫？」

晴の顔の、灯に殴られた箇所を煌は不安げに見つめる。

「う、うん……」

晴は頬を擦る。対して腫れてもいなかった。あの状況でも灯に手
加減されたのだろうか。

「宿題の続き、する？」

「うん」

そうして二人は宿題を再開した。

窓からは、

「うぎゃあああ！ ひいい、かにんしておくれええ！」

とか、

「ぶひゃひゃひゃひゃ、一単位げひゃひゃひゃ！」

みたいな声が響いてくる。

そういえば、あの先輩たちは二人共この島生まれだった。
野生怖え、マジ怖え。と、晴は思った。

激闘、持ち込み仕分け。

「なあ」

のろゝんとした空気の中、新芽が静寂を破って発言した。

それを聞き、読書をしていた晴は、ページの間にしおりを挟んで本を閉じた。

話題サイコロ二号を工作していた灯は、のり付けの途中で静止した。

腕立て伏せをしていた（なぜ？）辰巳は、片手だけのに切り替えた。

ぬぐんとしていた煌でさえも、意識だけはかろうじて新芽に集中した。

この部室において、新芽の発言は絶対の効果を持つ。

なぜならば、彼女はこの学校で唯一の三年生。ゆえに、遊部部长なのだ。

「なんですか？」

ここで尋ねるのは晴の仕事。

問われて、新芽はすつと見映えよく立ち上がった。

彼女は桐林新芽。長身の女子だ。立ち上がると晴よりも大きい。

出るところは出ている、締まるところは締まっているモデル体型。

美女の表現がよく似合う彼女は、中学生のころに天道島に来たそう。来てからそこまで年が経っていないせいか、はたまた日焼けしにくい体質なのか、彼女も煌と同じように色白だ。

「ああ、最近、この部室にもずいぶんといらないものが増えてきたような気がするんだ。持ち込みOKとはいえ」

彼女はぐるり、と部屋を視線だけで一周する。

「あ、あたしのらくらく工作キットはいらないものじゃないからね！」

と、灯。

「お、俺のふんどしもだぞ！」

激しく異議あり。

「わ、私の望遠鏡と寝袋も……」

あんたはここに泊まるつもりか。

「と、今聞いただけでも明らかにいらないものがあつたな」

「そんなバカな！」

「そんな……」

憤慨したのは辰巳と煌。本気でそう思っているのだろうか。

「というわけで」

新芽は腰に手をあてて、ビシッとモデルさながらのポーズを決める。

「今日は仕分けをしようと思うっ」

えゝ、と三方向からどよめき上がる。晴は別に平気だった。だって変なものは持ち込んでいないから。

「で、まず私が仕分けたいのが、」

新芽が部屋の一角を指差す。

「これだあ！」

それは少女漫画。

「ちよ、なんでよぉー！ 少女漫画くらい置いたっていいでしょ！」
灯が反対の声明を表した。どうやらあれは灯が持ち込んだものらしい。

「ならぬ！ 破廉恥すぎる！」

それを新芽は断固として通さない。

「はれんち？」

これには晴含め四人がみんな首を傾げることとなった。

「えと、少女漫画にそんなシーンありましたっけ？」

晴は少女漫画を読んだことがないからいまいちピンとこなかった

が、青年漫画などの方がよほどひどいものがあると思う。

「ある！ この本に、キ、キスしてるシーンがあっただろう！」

と、本棚から一冊を取り出し、真っ赤になって新芽は叫んだ。

「別に、普通でしょ。キスくらい」

少女漫画なんだし、と灯は続ける。

たしかに、その点では灯に同意できる。キスを破廉恥というのは少し新芽が過敏であるといわざるをえな、

「中にはエッチしてるのだってあるし」

「ぶは——っ！」

ぶは——っ！ と晴は新芽と同時に噴き出してしまった。

「まあさすがにそういうのは持つてきてないけどさ」

それが正解だろう。自分には刺激が強すぎるもの。

女子って進んでるなあ、と思いながら、晴は問題の少女漫画を手取る。パラパラとめくると、ああ、あった。好き合っていた二人がそれぞれの思いを告白し、キスしてヤッホーな場面だ。

「ほらここ！ このバカ高校生共を破廉恥と呼ばずしてなんと呼ぶ！」

横から覗き込んできた新芽が、晴から本をひたたくってそのイケナイ場面を灯に見せつける。

「な、なにいつてんのよ！ ここはね、幾多の障害やすれ違いを乗り越えた遥と雄二がついに結ばれるクライマックスなの！ これくらいやって当たり前なの！ 純情なの！」

つばを飛ばして灯は怒鳴るが、新芽だって負けぢやない。

「純情？ 笑わせるなよ！ 一体どこのカップルが付き合った初日にキスまでかますと思ってるんだ！」

「食いつくところかよ！？」

置いてきぼりの三人を無視して、灯と新芽は壮絶な舌戦を交わす。その白熱ぶりたるや、アメリカとロシアが冷戦ではなく本格的に戦争を始めていたら、のイフの歴史が垣間見えるほど。

「はあ！？ これはフィクションだっていつてるでしょ！ なんで

もかんでも現実世界に投影して考えないでよ！　ねえ、セイだって
そう思うよね！？」

そこで、アメリカ様の命令で戦争を放棄していたはずの日本こと、
晴にまさかの参戦命令が下った。ノーノー、日本戦争できませんよ
ー。憲法九条破っちゃいけませんよー。

「あ、あはは……」

彼女の目が同意を強要している。

「じゃあこの話はあいさつ代わりにキスが当たり前のお国の話なん
ですか？　違うよね、舞台思いつきり現代日本だね！　だったら
私たちの常識で物事を計ってもいいよね！　だいたい灯はフィクシ
ョンの意味を履き違えてるんだよ！　ね、セイだって私と同意見だ
ろ！？」

と思ったらまさかのダブルブッキング。だから日本には憲法九条
があるっていつてるじゃないですかー。そもそも北方領土問題まだ
解決してないじゃないですかー。

「え、えへへ……」

どっちに味方すればいいのだろう。

つか、煌と辰巳はいつの間にか安全地帯に避難しているし。これ
では自分だけ巻き込まれ損ではないか。

「ねえセイはあたしの味方だね？」

「いや、私の味方だろう？」

ギリギリと迫り来る二つの大国。弱小国は決断を余儀なくされて
しまった。さあ、どうするよ。どうするのよ僕。

「……実演したらどうでしょう？」

パツと思いついたことを口にする。

「「実演？」」

見事、二人はハモった。なんだか自分が二人から責められている
気分だった。

「ですからキスまではしないにしてもその問題のシーンを実演して、
それでも恥ずかしくなかったら今回はお咎めなしということ……」

我ながらとつさに考えたにはなかなかいい案かもしれない。

「いいわね、乗った」

灯の反応はよかった。

「じゃ、男役よろしくね、セイ」

「ええ僕う!？」

「当たり前でしょ、あんたが発案者なんだから」

「そ、そんなあ……」

ああ、自分へのリスクをまったく計算してなかった。

ちらりと安全圏の二人を見ると、彼らは仲良く合掌していた。イ
ラッ。

と、そこで新芽が待ったをかける。

「まあそれでいいけど、やるならもつとあとにして。今は気持ちが高ぶって大胆になっているだろうから」

このどんなにヒートアップしても冷静なあたり、狡猾というか、
なんというか。

十分経った。その間に灯と新芽はクールダウン、紅茶を飲む余裕
まで得た。淹れたのは晴なのだけねど。

「さ、用意はいいな？」

新芽は灯と晴を順繰りに見渡す。

こんなことやらずに済むならそれが一番いいんですけどね。

「当たり前よ」

それなのに、どうしてこちらの方はやる気なんだろう。

「やっぱり僕じゃなきゃダメですか？」

無駄と知りながらも、最後の抵抗を試みる。

「だって辰巳は……」

灯は辰巳を一瞥して、

「……嫌よ」

「俺だってゴメンだね」

「は？ 本当はやりたくてやりたくてしかたないんでしょ！？ 強がんなよ一単位の価値しかない筋肉バカ！」

「い、意味わかんねえし！ 強がつてねえしわけわかんねえし！」

「この期に及んでトラブルは起こさないでくださいよ……」

あつちとぶつかつたと思つたら今度はこつちでぶつかつて……

人間スーパードールだな。思いながらも、晴は真つ赤になって罵り合う二人を仲裁する。

「もう僕がやりますから。さ、手早く済ませましょうよ」

そして、実演を始めた。

（学校の校舎裏）

「『あ……ゆ、雄二くん』」

「『よ、よう、市川。それで、その……なんの用だよ？ お前、俺のこと嫌いだったんじゃない？』」

「『えと……それ誤解っていうかなんていうか……』」

「『なんなんだよ？』」

「『だから、私……雄二くんのこと嫌いとかじゃない……っていうか、その、ずっと好きだったの』」

「『！？』」

「『も、もちろん、ライクじゃなくてラブの意味でだからね？ だから、私と、付き合つて……ください』」

「『……』」

「『雄二くん……』」

「『……』」

（晴が灯を抱きしめる）

「ひやうつ。『！？ 雄二くん！？』」

「『えと、その……俺も、お前のこと好きだった……』……うわ、これめっちゃ恥ずかしい……」

「『……え？』」

「『だから、うん、こちらこそ、よろしく願いします』」

「『……雄二くん……』」

（しばし無言で見つめ合う）

「『ねえ、雄二くん』」

「『なんだ？』」

「『その……キ、キスしても、』——」

——つていえるかアアアアアアア！——

灯は晴の腕を振り切り、魂を全て放出することく大絶叫した。演目は中断を余儀なくされた。

「あーあ、もうちよつとだったのに」

辰巳が残念そうに呟く。

「そこ！ 楽しむな！」

鬼の形相で灯が指差す。

「むー、残念」

「お前もか！」

口惜しげに下唇をつきだす煌に、灯は驚きを隠しきれない。

「せっかくムービー撮ったのに」

「どんだけ悪質なんだよ！ 消せ、今すぐ消せ！」

と、強く要求するが、

「やー」

煌は意にも介さない様子で軽くかわしていった。ケータイをいじって先ほどの場面を最大音量で再生する。

『……ライクじゃなくてラブの意味で。だから、私と、付き合っ

て……ください』

とか、

『えと、その……俺も、お前のこと好きだった……』

とか。

「ヒイイイヤアアアアアアア！」

「うああああああ……」

約二名、悶え苦しむ。

「マジで、マジで勘弁してください」

晴は土下座して懇願する。

どうして、なにも悪いことをしていない自分がこんな目に合わない
きやいけないのだろう。

「そうよ。やめてあげなさい」

だから、こんな場面で、この新芽のセリフは本当にありがたかつ
たね。

「あとで私がもっと高画質のヤツあげるから」

「あんたは悪魔かアアア！」

うつかり敬語すら忘れてのツツコミ。

「うふふ、ニコ動にもアップしてみようかしら。『〇〇の告白シー
ンやってみた』みたいな感じで」

「ヒギイイイ!？」

晴は卒倒しかける。豚みたいな鳴き声まで上げてしまった。

「お願いですから…… お願いですからそれだけはやめてください……
…。全巻まとめて持ち帰りますからあ」

灯はもう四分の三以上泣いていた。時々目の端をこすり、嗚咽を
漏らしながらせつせと少女漫画を棚から抜く。

…… ちよつと不憫に見えてきた。

「あ…… いいよ、別に」

新芽にも伝わったのだろう。

「私もそれ全巻読んだし。他のところはわりとおもしろかったし」
「シン姉……」

とたんに灯の顔がぱあつと輝く。

「だから、うん、いいよ。ぶっちゃけ実演するところを見たかった
だけってのもあるしな」

「シン姉、大好き！」

灯は新芽の豊満な胸に飛び込んだ。いいなあ僕もやりたいなあ、と一瞬だけでも思ってしまうのは晴が男子たる証拠だ。

ところで、実演するところを見たかっただけって部分にとってもひっかかりを覚えるのだが。

まあ、今は追及しないでおこつ。

ところでこんな様子じゃ仕分けははかどらないだろうなあ。と晴は思った。

続闘、持ち込み仕分け。

「さて、今日私が仕分けたいものは」

つつかつかと、新芽は本棚に向かう。

「好きですね、本棚」

晴の発言は鮮やかにスル―。

ピクツと灯の肩が跳ねる。先日のもあつて、灯は仕分けに過敏になっていた。

「ぬう……俺のふんどしを本棚の裏に隠したのがバレたか……？」

「そこまでしてふんどしを部屋に置いておきたいんですか？」

と、晴。

「はっ！ うっかり隠し場所を口に出してしまった！」

どうしようもなく辰巳はバカだった。

大丈夫ですよ、あんな本棚、まずあなたにしか動かせませんから。

「じゃあそのとき圧縮した寝袋と一緒に隠したのがバレた……？」

「僕は時々ヒカルがとんでもなくバカに見えるよ。天才キャラはどこいったの？」

「はっ。うっかり隠し場所を口に出してしまった……」

「ねえ君やつぱりバカでしょ？」

そんな間抜けなやりとりを尻目に、新芽は上段から本を引き抜いた。

同時に、灯がほつと息を吐く。なぜなら高いところには彼女の本はないのだ。背が届かないから。

「で、これは……セイのかな？」

「あっ、はい」

晴は驚きを隠しきれずに答えた。自分が仕分けにかかるようなも

のを持ち込んでいるとは到底思えなかったからだ。

「これはなんだ？」

「ライトノベルです」

新芽が持つ、表紙にイラストのついた本の名前を、晴はいう。

「なんだそれは？」

が、新芽はそれだけでは理解できなかったらしい。

「中高生向けの読みやすい小説です」

「そういえばセイそういうのよく読んでるよねー」

今回は自分に関係ないからと、調子に乗った灯が蚊帳の外から介入する。

新芽がまた口を開く。

「ふーん。まあ名称はどうでもいい」

「じゃあ聞かないでくださいよ」

「とにかく、これはアウトだと思うんだ、表紙からして」

「あーたしかに。なんかオタクっぽいもんねー」

また灯。失礼な奴。

「てか、それ読んだときのセイ、にやにやしてて若干気持ち悪い」

「そ、そんなバカな！」

あわてて、よくラノベを読んでいるとき側にいる煌を振り返ると、

——こくこくこくこくこくこくこく。

激しくうなずいていた。

うわー、ちよつとショックだわ。

「ま、待ってください！　いくらなんでも表紙がオタクっぽいからNGってのは横暴すぎるでしょう！」

晴は珍しく声を張り上げて抗弁する。大好きなラノベがかかって
いるのだ、そりゃムキにもなるというもの。

「うん。私もそう思ってたな、読んでみた」

「どうでした！？」

「存外おもしろかった」

「でしょう！」

じゃあいいじゃん、と繋げようとしたところで、

「だがおかしいところがある。絶対こうはならないだろう、ってところで、その、破廉恥な展開になるのがいただけない。さしあたり十冊読んだんだが、」

「十冊も読んだんですか」

「そのうち実に八冊に謎の色気シーンが見受けられた」

弁明してみる、と晴にバトンを回す。対して晴はまったく焦っていないかった。我が心已に空なり。彼の胸中は仙人の領域、無我の境地に達していた。

余裕たつぷりに説明を始める。

「それはいわゆる『ラッキースケベ』という現象ですね」

「……らつきーすけべ?」

四人揃って首を傾げる。

発言が発言だけに、その光景は実にシユールだった。

「はい。ラッキースケベとはライトノベルにおける枕詞のようなものです。和歌であしびきのと来たら山鳥の尾が来るように、久方のと来たら光のどけきが来るように、ラノベでは風呂に入ったら事故で覗き、つまり転んだら胸を触らなければならないんです。これがなかったら読者はがっかりです。おいてめえラノベのルールに従えよ、となるわけです。ついでに言えばメディアミックスされる作品に多くこの傾向は見られ、ここに置いているのはそういう作品がほとんどなので新芽先輩の目についたのでしょうか」

ここまで一息でいいきった。

長い。むちゃくちゃ長い。せめて改行して見やすくしろよ、といつても目が眩みがちの晴には不可能な技だ。

「えーと、つまり、ライトノベルというジャンルにおいてそういうシーンは必要不可欠ということだな?」

新芽はこめかみを押さえて尋ねた。

「そういうことです」

晴は自信満々に答える。

新芽は三人に向けて、

「これはもういりませんね」

「「はい」「」」

そして三人ハモリ。

「ちよつとちよつと！ どうしてそんな結論になるんですか！」

慌てる晴。

「だって気持ち悪いし」

と灯。

「漢字読めねえし」

と辰巳。

「……キモい」

最後に煌。

「だそうだ。異論はあるか？」

「ああありますよ！ まず灯先輩！ それは偏見です！ ラノベ

の中にはそういうんじゃないのがあります！ 今度貸しましょう！」

「いや、いい」

「それから辰巳先輩！ 漢字が読めないのはあなたの責任です！」

「知つとるわあ！」

「それからヒカル！ お前それは結構マジで傷ついたぞ！」

「……見損なつた」

三者は三様に、それぞれの苦々しい表情を浮かべる。

「旗色が悪いみたいだな、セイよ」

新芽が余裕たつぷりに告げる。

「くつ、まだまだあ！」

このときの晴は今までにないくらい燃え上がっていた。

彼にとってライトノベルはかけがえのないものなのだ。絶対に、

居場所を奪われてたまるものか。

——あいつらはここにもいいんだ！

「ところで、私たちにライトノベルの持ち込みを認めさせる妙案があるのだが」

「断ります。どうせ実演でしょう」

一方で、冷静になっっている自分もいた。灯の二の舞になるつもりは毛頭ない。

「しかし、私たちは他の方法で認める気はないぞ？」

氷の微笑で新芽はいい放つ。

「ぐっ、卑怯な……」

こいつら、始めからこれが狙いだったのだ。晴に色気シーンを実演させ恥をかかせる腹に違いない。

だが、晴は負けない。

ライトノベルの正当な権利は是が非でも守り抜く！

世界中のライトノベルのために、僕は、戦う！

晴は一冊の本を新芽につきつける。

「残念でしたね、新芽先輩。これは小説であり漫画ではない。つまり、僕がナレーションをするにしても、そちらからあと二人犠牲者を出さなければならぬのです！ プラスマイナスで考えて、最終的に害を被るのはそっちですよ！」

この言葉に、灯を筆頭に辰巳、煌の三人組は一步退いた。

だがしかし、新芽はその程度で倒せるほど又ルい相手ではない。

卑怯と法の網くぐりにおいて、新芽に勝てる者はいない。

「バカめが。そんなことはこちらの本を使えばどうとでもなる。わかってるな、これは一人称だ！ それならば語り部と主人公は同一人物、つまり一人ぶん席が埋まるということだ！」

やはりそう来たか。でもまだまだ、これくらいで終われない。

「それでも僕の他に一人死人が出る！ それを誰がやるのですか？」

灯と煌を見やると、灯は「ヒッ」と悲鳴を上げ、煌は恐ろしげに肩を抱いた。

「……それとも、あなたがやりますか？　ねえ、新芽先輩？」
ニタアリ、粘っこい笑顔で晴は自分の勝利を確信した。
――が。

新芽の打ち出した策略は晴の想像を遥かに上回る、残酷なものだった。

「やらないとも。もちろん、女役も君がやるんだよ？」

……え？

「それはつまり……朗読ですか？」

「そういうことだな。役になりきれよ」

がらがら、と晴は自分の牙城が音を立てて崩壊するのを感じた。

「そ、そげな……」

晴は崩れ落ちて床に手をついた。

負けた。

完敗だ。

これが新芽の実力か。勝てやしない。自分なんて、足元にも及ばない。

もはや、愛するライトノベルを守るには自分が死ぬしかない。お色気シーンを朗読する姿を撮られて動画サイトにアップされて……待っているものは社会的な死だ。

「しっかりしろ」

傍らには新芽が寄り添っていた。

「そして、読め」

すつ、と差し出されたライトノベルに晴は息を呑む。

それは、晴が持つ本の中でも圧倒的にエロシーンが強いもので、アレをソレにぶっ刺したりと、結構ガチな描写とかもある。思わず読み飛ばしてしまったほどだ。

「これ……読んだんすか……」

絶望的な気持ちで胸が一杯になった。

「ああ。なかなかエグいシーンがあったよな。官能小説みたいだったよ」

ククク、と新芽は喉の奥を鳴らす。これから始まる残酷なショーが楽しみで楽しみでたまらないらしい。この人は真性のSなのだ。もう逃げ道はない。自分の尊厳とライトノベル。どちらかを生かすならどちらかを殺すしかない。

決心しろ……。決心するんだ。答えはもう決まりきっている。ただ、勇気が足りないだけ。振り切れ、振り切れ……。そう、僕は無駄死にするわけじゃない！

自分にとってかけがえのないものを生かすために死ぬんだ！

「うおおおお！ 見てろ！ やってやる、僕はやってやるぜ！ 朗読がなんぼのもんじゃない！ ニコニコ動画がなんぼのもんじゃない！

ラノベのためだったら――

――命だって、懸けてやる！」

空に……。厳密には天井に叫んだ晴の目は決意に燃えていた。

それは、爆弾を体中に縛りつけて敵陣に単身で乗り込む死を覚悟した兵士、まさにその瞳だった。

「……セイって案外バカよね……」

「……キモい……」

聞こえない、聞こえない。聞こえたら、負けだ。

そこで新芽が、

「それじゃ、あと十分後、頭が冷えてからやろうね」とどめの一撃を放った。

「そ、そんなぁ……」

がくつと晴はうなだれる。まさか最後の勇気さえ発動の権利を与えられないとは。

彼女はとことん容赦なかった。

今後、この人に齒向かうのはよそ。と晴は思った。

四頭龍騎の打ち手VS盤上の駆け手。

「将棋持ってきた!」

部室に入るなり、辰巳は宣言した。

しばらくの間、四人は無言になって、それから額を寄せ合う。

「どういうことですか? 前々回から二話続けて持ち込み仕分けをしたばかりだというのにもう持ってくるなんて」

「しかたない。ああいうヤツだ」

「バカなのよ。昔っから」

「……バカ」

「ちよつとちよつとお! みんなこつち向いてくれよ!」

寂しそうに辰巳はいう。

嘆息混じりに晴は振り返り、

「どういう思考の回路でそんなものを持つてくるのに至ったんですか?」

「お? いうじゃねえかセイ。お前前回気持ち悪かったくせに」

「そこを覚えるくらいなら持ち込み仕分けの方を覚えてください」

てか、ラノベの件はすぐさま忘れて欲しい。あのときは多少暴走していた。

辰巳はじゅうたんに座ると将棋盤を広げて、

「座れ、セイ」

と促す。

「なんで僕なんですか」

「お前が一番弱そうだからだ。やっぱり順々に強くなっていけないと、おもしろみがねえ。次は灯な」

「はっ? あたし舐めんじゃねえぞ! ヒカルよりは強えかな!」

「……やる？」

女は女同士で火花を散らす。

とにかくにも、晴と辰巳はまず駒を並べた。上から目線だけあって、辰巳も一応将棋のルールは知っているようだ。駒を定位置に並べられている。……バカにしているわけではない、ただ相手が辰巳だと不安になるのだ。

「それじゃ、始めましょう」

晴がじゃんけんで先後後手を決めようと提案したが、

「お前が先手でいいぞ」

辰巳が譲った。

「はあ」

曖昧に晴がうなずくと、

「いっておくがな、セイ。俺のじいちゃんは島内でも五本の指に入るほどの将棋の名手なんだ」

「ばっ、と『将』の字がでかでかとプリントされた扇子を大仰なしぐさで開く。

「そして、この俺はじいちゃん相手に一度も負けたことがない」

たしかに、甚平姿とその扇子はどことなく風格があった。

「それでは、胸を借りるつもりでいかせてもらいます」

「おう、見せてやるよ、神の一手を」

「……それは囲碁です」

やるぞやるぞと思ったら本当にボケてくれた。細かいところまで外さないひとだ。ボケの天才。

本人は「そうだったけ？ まあいつか、だはははは！」とかいってるけど。

女衆もいつの間にかじゅうたんに上がって、観戦する気満々だ。

辰巳の実力がどれほどかは知らないが、彼女ら見られている手間、恥ずかしい戦いはできない。

晴は改めて気持ちを引き締め、先手で対局開始。

初手は一番左の歩を一つ進める。角の突破口を開くためだ。

「ふむ」

当然、辰巳は金で正面をガードする。まあこの辺りはお約束の手だ。

そして、どちらが相手の陣地に先に入ることができるか、という戦いを先に制したのは辰巳だった。

「ふっ……もらったぜ、セイ」

辰巳の角が、晴の歩を倒して陣地に攻め入ってくる。同時に成り、龍馬となる。

「くそっ……僕の金矢倉が……」

晴は唇を噛む。彼が構築した囲いは、辰巳の怒涛がごとき戦陣にもはや風前の灯火だった。しかもこの上龍馬を警戒しなくてはならない。苦しい戦いになった。

「すごい、辰巳が押してる……！」

「信じられん……」

「奇跡」

傍観者の灯や新芽、煌までも驚愕を隠せなかった。ていうか煌は露骨にひどい。

「くくくっ、セイよ、龍馬が怖いかな？」

不敵に笑む辰巳が尋ねる。

「それは、まあ」

晴が答えると、辰巳はいつそう楽しげに顔にしわを寄せた。

「たしかにこの龍馬は脅威だ。だがな、お前にとって真に警戒すべきはこの歩。これを使って俺はお前を追いつめる」

「なっ……？ 一体どういう？」

「ふふふふふ！ とくと見よ！ これこそが俺の真骨頂、『烈歩の陣』！」

瞬間、空気が凍りついた。完全に、観戦者含め全員の裏をかいいた一撃。

そんな、バカな……。こんな状況でこんな手を……！
この手は……！

「二歩ですね」

…… 本当に、予想の斜め上をいつてくれる。

かくして、緒戦は晴が制すところとなった。負けた彼は、
「そんなバカなあああ！」

と喚いていたが、ルールブックを読むところからやり直してくだ
さいと諭しておいた。

「さ、次の相手はあたしね！」

そんなわけで晴の前に立ちはだかるは二年生コンビの片割れ、灯。
「灯先輩は強いんですか？」

「強いよ！」

驕りも過信もなく、いいきる。これは本当に強そうだ。
また、晴から対局開始。

打つこと数分。

「あわわわわ……」

もうすでに晴は差し込まれていた。

「王手飛車取り！」

「ありい！？」

「そして今奪った飛車を使って、王手角取り！」

「おりい！？」

「さらに角を使って王手！」

「はべりっ!？」

「最後に飛車を上げて、詰みい！」

「いまそかりiiiiい！」

あっという間。

ラ変動詞を叫んで晴は散った。

晴はボタンキュー。滝のように涙を流しながらえぐえぐいつている。

「にやはははは！ セイ弱っちー！」

灯はもうピノキオもかくやというほどに鼻高々。晴の頭を歩のかどつこで叩いている。地味に痛い。

「うえええん、ぐやぢいよおん！」

ハンカチがあつたら噛みたいところだったが、あいにく持っていなかったのでネクタイを噛む。

と、二人の間に煌が割って入る。

「あれれー？ どうしたのかなヒカルちゅわーん？ その負け犬がかわいそうになったのかな？」

へらへらと灯。

「灯先輩、セイいじめた。許さない」

対極的に、こちらは怒りでメラメラ燃える煌。

「私と対局して」

上段者である灯は、煌の闘気をただ者ではないと瞬時に判断した。そして、その判断は間違っていない。

「なるほど。なかなかの実力者と見た。けど知ってる？ あたしは今の対局で実力の半分も出してないのよ？」

「それでも……勝つ」

これほどまでに闘志をむき出しにする煌を、晴はじめ遊部員全員初めて見た。

灯は少々たじろいだものの、

「見ての通りあたしの打ち筋はまず相手の飛車角を落としてそれを使って王を落とす戦法。そこからあたしは『四頭龍騎の打ち手』と

呼ばれているわ」

いきなりパクリ設定乱入。

「私の駒は駒の意思通りに将棋盤の上を縦横無尽に駆け巡る。ひと呼んで『盤上^{はんじょう}の駆け手』」

と思いきや、煌まで乗ってきた。これには晴も予想外だった。

「ふーん。あなたも異能の討ち手ってわけね。おもしろそうっ」

「先ほどの対局を見るに、あなたの打ち筋にはムラが多い。同じ異能者でも『戦技無双』と謳われた私の敵ではない」

「いつてくれるわね。でもそういうことは対局の中で証明してね」

「いわれなくてもそうするつもり。それでは、いざ、尋常に、」

「勝負（！）」

最後は格好よくハモって、対局開始。

「ところで二人共僕のラノベ読んだ？」

涙も乾いた晴が尋ねると、

「……………」

二人は仲良く赤面した。

「くらえ、本美濃囲い！」

「本美濃囲いには下からの銀打ち」

「なら穴熊でどう!？」

「穴熊には角と桂馬打ちで封殺」

灯と煌の将棋はもはや将棋のレベルを超越していた。というか明らかに通常のルールより行動範囲が広い気がする。

ギャラリーがついていける世界など、とうの昔に越えている。

「そこで容易に角を出したのが命取り! あたしの真骨頂は四頭龍騎よ!」

「甘い。そこは飛車のテリトリー」

現状、煌が一歩リードか。

「ほら守りが薄くなった! この隙を一気にもらっていくぜ! 王

手！」

と、思いきや先にしかけたのは灯。

しかし、

「単発の王手じゃ私は討てない」

「くうっ！」

「そろそろ厚い壁を破らせてもらう。もう攻略の道は見えている」

煌は飛車、角、桂馬を駆使して灯の穴熊を解体していく。

「ああ、あたしの王が丸裸に！」

「これで終わり……であります。いけ、金底の歩。——詰みです」

「∞ぶ*ぶべ らびsなw（o）w！！」

ばひゅーん、と漫画みたいに灯は飛び上がり、大の字にぶっ倒れた。

「か、完敗や……わたの完敗や……」

灯はきょとんと目を丸くしていた。まるでいまだに自分の負けが信じられないとでもいいだけに。

煌は立ち上がり、灯を見おろす。

「もう行ってしまうの……？」

灯は懇願するように尋ねる。

煌はくりと背を向けて、

「因果の交差路でまた会いましょう」

思い出したように呟いた。

「『盤上の駆け手』……」

『四頭龍騎の打ち手』こと灯は目を輝かせた。戦闘を通じて、いつの間にか二人の間には絆が生まれていた。

彼女たちは戦いの中でしか生きる場所を持たない。戦いの中でしか自分の存在すら肯定できない。

今、彼女たちは互いに生を認めあえる唯一無二の存在、そんなものに出会ったような心境であったのだろうか。

背を向けたままの煌、その握りしめられた拳が帯紐を緩める。

美しい友情が芽生えた二人を見て、

今回の話はいろいろと大丈夫なんだろうか……。と、晴は思った。

大きな木の下で。

天道高校は校庭が芝生だ。

天然芝、といえば聞こえはいい。まるでサッカー名門校のようだが、しかしてその実態は、地面がでこぼこすぎてしょっちゅうボールがイレギュラーするわ、一時間目に体育があると朝露で足元がびしょびしょになるわ、どう考えてもデメリツトの方が多い。

ちなみに体育は全校生徒同時に行っている。それでもバスケットムが一つしか作れないのだが。

ところで、晴は昼休みにその校庭をてくてくと歩いていた。

校庭の隅にそびえる大木、通称天高の主の根元に、煌が座っているのが見えたからだ。

「なにしてるの？」

晴は尋ねた。普段、彼らは部室で昼食を摂っているため、今回の煌の動きは不自然といわざるをえない。

答える代わりに、煌は読みかけの分厚い本を晴に見せた。

「それ読んでるの？」

こくこく。イエスだそうだ。

これはまたクエスチョンマークを浮かべさせられる。煌が持つ本は、なんかの古文書みたいに古めかしくて、とてもじゃないが高校生が読むようなものではない。

ポンポンポン、と沸き出る質問を、晴は頭の中で、パチパチパチン、とシャボン玉のようにかき消した。もとより煌は謎な雰囲気を持つ少女。今さら不思議に思ったところでどうしようもない。

「隣、いい？」

言葉が勝手に口を衝いてまろび出た。自分でもどうしてこんなこ

とをいったのか、わからないが、どこか本能的なところでこれは千載一遇のチャンスな予感がした。

こくり。煌はうなずく。

お言葉に甘えて、失礼する。日の照りは強く、長い間日向にいるとそのうち頭が痛くなりそうだったが、日陰は涼しく心地よかった。ちらと煌の読んでいる本を覗きみると、そこには晴には理解できない外国語の羅列と意味不明な図形が描かれていた。

「それ、なんの本？」

「家にあつた、近代天文学の本。ガリレオとか、そんな時代の」
なんでもないことのように煌は返す。

「……………」

晴は、今彼女の知性のルーツを見たような気がした。

「読む？」

「いや、いい」

なんか、いつかライトノベルであんなに熱くなっていた自分が恥ずかしくなった。

「そういえば、ヒカルって星とかに興味あるの？ この前も部屋に望遠鏡持ってきてたし」

「うん。もちろん星だけじゃなくて宇宙とか月とか銀河とか星座とかそういうの全部含めてみんな大好き。太陽の年齢とか宇宙の広さとか宇宙人の存在とかもう考えただけでもわくわくするわ……………」

嬉々として饒舌に喋り、そこまでいって我に返った煌ははっと顔を赤らめた。

「う……………ごめん」

うつむいて、彼女は調子に乗って語りすぎたことを謝罪した。
晴がフォローに入る。

「いや、その気持ちわかるよ。僕だって宇宙の終わりとか考えたら結構楽しいもん。そういうのが解明された未来の時代に生まれたかったとも思ったりもするし」

すると煌はにっこり笑って、また読書に戻った。

そして空白の時間がすぎていく。

耳に入るのは、葉のざわめきと煌がページを繰る音だけ。

木漏れ日に目を細めると、ふわふわと体が浮いていくような心地がして、なんだかとても気持ちいい。一つ小さなあくびをして、そのまま自然な流れで晴は完全に目を瞑った。

そこからは早かった。晴は自分の頭が傾いていくことにも気がつかぬまま、落ちるように寝入った。

肩に重みを感じて、煌は文字から目を離して隣を見る。

重みの正体は晴の頭だった。

「……………」

つつん、とつむじの辺りをつついても起きる様子はない。煌は困ったように軽く口をすぼめて息を吐いた。

起こすのは諦めて、煌は晴の頭を優しく撫でた。この前撫でたときにも思ったが、晴のワックスなどをつけてない髪は女の子みたいにサラサラで指通りが気持ちいい。それで何度も何度も頭を撫でる。晴の寝顔は微かに笑んでいた。いい夢を見ているのだろうか。

安らかに眠る晴に、煌も眠気を誘発されたのか、ふわああと人目もはばからずに大きなあくびをする。美白でみずみずしい頬を晴の頭の上に乘せた。

風でページがめくれてしまうのも構わずに、煌までもが睡魔にそのまぶたをおろした。すうつ、とたちまちにして意識が遠のいていく。

どこかで、カシヤツと機械的な音がした気がした。

……このとき新芽に撮られた写真によって後々晴と煌は死ぬほど恥ずかしい思いをすることになるのだが、二人はまだそれを知らない。

ぶ。

それは晴が部室で本を読んでいるときのこと。

「ねえその本ってさー」

じゅうたんでゴロゴロしていた灯が思いついたように口を開いた。
今部室には晴、灯、煌の三人がいる。

「なんですか？」

晴は本から目を浮かせた。ちなみに今彼が読んでいる本は社会現象にもなったアニメの原作シリーズで、この巻は単体で映画化したこともある。

「タイトルのう段の音を全部ぶに変えたら『ぶぶ宮八ぶヒのしよぶしぶ』だよな」

「なんで変える必要があるんですか」

くだらないくだらない、と晴はまた本の世界に戻ろうとしたが、

「『ぶぶ宮八ぶヒ』って……豚みたい」

おまけに、ぷっ、と小さく噴き出したのを聞き、頭の中が真っ白になった。

この感情はなに？ 怒っているの？ それとも……悲しいの？

自分でもわからない。この、喉に小骨がひつかかる感覚が理解できない。けれど、一つわかることはある。

このまま……退くわけにはいかない！

「先輩……全国のファンを代表して僕に土下座してください。さもないと……えーっと、とにかく、大変なことになります」

静かに、告げる。これは最後通告。この一線を越えたら晴はどうなってしまうかわからない。脱がしてしまうかもしれない。縛ってしまうかもしれない。垂らしてしまうかもしれない。

ところが灯は、そんな晴を小バカにするように、

「竹宮ぶぶこ」

「ああっ、僕が一番好きな作家を侮辱しましたね！　もう許しません！」

「とあぶ魔ぶぶのインデツぶぶ」

このように、次から次へと爆弾を投下していく。

ひどい。ひどすぎる。こんな残酷な行為があつていいのか？

晴の心は関東大震災後の東京下町よりも荒廃していた。

そして、ついに精神が崩壊した。

「ああああああ！　やめろお、やめるんだ！　それ以上愛すべきライトノベルを侮辱するのはやめてくれええ！」

「ぶラララッ！！」

「なんか卑猥だああ！」

もう耐えられなかった。晴にとってライトノベルをそんなふうに扱われることは拷問に等しい。それは『爪と肉の間に針が刺さった』などの痛々しい文章よりも深く晴の心をえぐる悪魔のスペルなのだ。そこから十連続まで及んだ『ぶの恐怖』で晴は、

「はぶぶ！」

と叫んで完全に撃沈した。顔面の穴という穴全てから体液を垂れ流して。具体的にいえば、目からは漫画のような涙が流れ、鼻からはしょっぱい鼻水があごまで垂れ、口からはよだれがたらたらと、本にしみを作っていた。

はつきりいつて、気持ち悪かった。

たしかな手応えに口元を邪悪に歪めた灯は次のターゲットを煌に決める。

「藍星ひかぶ」

にやり、と一言。

確実にダメージを与えたはずだった。しかし、当然ながら煌は晴ではない。彼女は反撃するという知恵を持っていた。

「ぶぶのはぶ恋を君に捧ぶ。……ボブって誰（笑）」

煌の一撃は拔群の効果だった。特に「ボブって誰（笑）」のかっこ笑いかっこ閉じるが相当なダメージを与えた。

「ぐっ……」

灯は言葉につまる。そう、彼女は煌が興味を持っているもの知らない。煌は天文学が好きだという事実は、現状では晴しか知らないのだ。

「こぶこぶデブー……ゴブリン系のモンスターみたい（笑）」

そして無機質な声で放たれる口撃がごとく灯の神経をすり減らす。

「うう、くうっ、ヒカぶのくせに……ヒカぶのくせに……！」

灯は涙目になって訴える。だがそれもはや負け犬の遠吠えでしかない。煌は薄く笑って跳ね返した。

「ハぶぶウエイ」

「あひんっ！」

泣き叫び、灯は地求人と宇宙人のハーフの子を身を呈してかばう緑色の宇宙人のように両手を広げる。

「きよぶ、恋を始めまぶ」

「っああん！」

そして仰向けに倒れた。

「ごめんね……セイ、ごめんね……。あたし、あなたの苦しみもわからないでこんなに恐ろしいことをしていたなんて……」

涙ながらに謝罪しても、当の晴はすでに顔面体液人間と化していて、彼女の声など届くはずもない。「ぶぶ、ぶぶぶぶぶ」といいながら口から泡みたいな唾液をばたばたと紙面にこぼすばかりである。この本は明日には本棚からきつと消失していることだろう。

「とどめ」

煌は灯の額にピストルの形にした手の指先を突きつけて、

「……ぼぶ等が居た」

「ぺくちゃっ!？」

次の瞬間には顔面体液人間の二人目が、無惨にも転がっていた。

煌は手を離し、灯の涙やら鼻水やらで汚れた指先を彼女のＴシャツで拭き、

「……醜い」

心から、そう思った。

迫る校外学習。

「もうすぐ遠足だな」

わくわくを抑えきれない、といった様子の灯は、にっこり満面の笑みで会話の口火を切った。

「……嫌なこと思い出させないでくださいよ……」

対して晴は額に手をあてて苦々しく返した。

「あんなわけのわかんない校外学習は初めてですよ」

今日、一年生の晴と煌はホームルームの時間に校外学習についての説明を受けていた。灯が今この話題を切り出したことから考えて、二年生もそうだったのだろう。

「そうか、君らはここの遠足は初めてだったな」

となると順当に三年生もそうだったようで、新芽も話に加わる。

「はい。……まったく、生徒だけで島の中のどこでも好きなところに行つて翌日レポート提出つて……投げやりすぎでしょ」

自由すぎる。晴もこれが普通の高校だったら喜んでいただろう。

しかし、ここは全校生徒が五人しかいないということを忘れてはならない。

つまり、こういうときにわいわい騒げる同性の友達がいなのだ。代わりにいるのが煌一人……あまりにも酷だ。

「お前らはまだいいだろう。私なんか……一人だぞ。去年も一昨年も一人だぞ」

……新芽がかわいそうに見えた。

「僕だって似たようなもんですよ。いや、気まずいぶんもつとひどい。そうだ、だったらみんなで行くことにしましょうよ」

そう提案した晴の頭を、灯はグーでおもいつき殴った。

「いいっ？」

ゴツツ、と頭頂に鈍い衝撃が走る。しかもずきずきとあとに残る痛み方。

「お前バカか？」

次いでヘッドロックを極めながら、灯は小声で非難する。

「そんな言い方したらヒカルが気分壊すに決まってるだろうがっ。少しは気を遣えよ大バカ野郎」

「あっ……」

あわててヘッドロックの緊縛から逃れて煌を振り返り、

「ご、ごめん……」

謝ったが、

「いい」

煌の返事はそれだけだった。彼女は顔にいつもと同じ、ぬぐんとした表情を浮かべていたが、心なしかどこか怒ったような雰囲気を感じていた。灯にまでジト目で見られ、立つ瀬がなかった。

「まあなんだ、どっちにせよ校外学習は学年別で行くのがルールかつ伝統だからバラバラで行くしかないよ」

場の空気を切り替えようと新芽がいい、

「そもそも俺の完璧なデー……こほん、遠足プランの中にお前の居場所はない」

辰巳もそれに続いた。

「行くところ決まってるんですか？」

「まあね。でもあたしは基本辰巳任せだから当日までわからないけど」

晴の問いには灯が答えた。辰巳はグツと親指を立てている。あの辰巳が予定を計画できるとは意外だった。

「私は……お天気研究所でも見学してこようかね、真面目気取りで、セイはまだ決まってるのか？」

なんだそのポケ。ンに出てきそうな研究所は。しかも妙に聞き覚えがある。

「んー、ないですね」

困り顔で晴が答えると、

「今決めりゃいいだろ」

と辰巳。

「そうだね！」

同調して灯。

「それは辰巳にしてはいい案だ。そうと決まればいますぐ会議だな。ほら、ヒカルのもとにいつてこい。ああ、私たちのことは気にするな、好きにくつろいでるから」

さらに新芽。

三人は晴が「えっ、ちょっと」と抵抗するのも構わず、ぐいぐいと彼を煌のところへと押していく。

「よし、じゃああとはよろしく」

最後に新芽がいうと三人はそそくさと解散して、図工、筋トレ、宿題と各々の作業に戻ってしまった。

ああ、機嫌が悪い煌のなだめ役を買わされたんだな、と晴はようやく気づいた。

煌を見ると、彼女はさっきよりもあからさまに、むすつとしていた。とはいえ凡人にはまだまだ識別不能の域だが。一ヶ月近く彼女を観察してきた晴だからわかる。

「えっと、さっきのは本当にごめん。でもヒカルのが嫌いだとかそういうつもりでいったわけじゃないからね？　ただ、やっぱり男子と女子なわけなんだし二人きりで行くのは恥ずかしいっていうか」

ああ、ダメだ。弁解すれば弁解するほど煌の機嫌が悪くなっているみたいだ。

「それじゃ、どこ行こっか？」

と尋ねてみるが、

「どこでもいい」

煌の回答は無機質なものだっただ。

シュン、と晴は肩を落とす。数分前の自分の無神経さを呪った。しかし、煌は特段怒っていなかった。その証拠に晴の質問にちゃんと答えている。もし怒っていたならこんな問いは鮮やかにスルーしているところだった。本当にどこでもよかったのだ。

もちろんそんなこと知るよしもなく、晴は必死になって煌が喜んでくれそうなスポットを考えていた。

そして、答えは簡単に見つかった。

「星見ようよ」

いつかの昼休み、木の下で交わしたやりとりがここで役に立った。煌は晴を見つめて目を丸くした。

「ダメ、かな？」

ぶんぶんぶん、首を振る。髪の毛ばっさばっさ。

「ううん、見る！」

そして煌にしては珍しくエクスクラメーションマーク付きで答え、自分の声の大きさに、かあああつ、と赤くなった。

「やっぱり……」

「……ああ……」

「……だな……」

背中からひそひそ話が聞こえたので、晴は振り返ったがすでに三人は各自の作業を行っていた。

晴は首をかしげる。

腑に落ちないけど、まあ、いいか。

「じゃあどこで見る？」

「ここの、屋上」

煌は天井を指差す。

「それって厳密には校外学習とはいわなくない？」

「いいの。放課後になれば学校は学校じゃなくなるから」

いやいつでもどこでも学校は学校ですけどね。

「でもこの屋上がこの島の中で一番空に近いから」

嬉しそうに語る煌に晴は思わず頬を弛めた。普段が普段だけに、表情豊かな煌はとてつもない威力を秘めているのだ。

「じゃあ寝袋もう一つ持ってきて、あと懐中電灯も持ってきて……あれも……それからこれも……」

「泊まること前提なんだ……って泊まるつもりなの!？」

そんなふうにあれこれ思索する煌をちよつと大丈夫かなと思う反面、やっぱりかわいいなあ、と晴は思った。

恋をしようよ。

「俺……告白しようと思う」

男二人しかいない部室でいきなり辰巳がこんなことを宣言するの
で、晴はきょとんとした。

「告白、ですか」

「告白、だ」

辰巳の顔は大真面目。冗談でいつているわけではなさそうだ。

「灯先輩ですか？」

タメで幼なじみの灯か、と晴はたかをくくっていた。どう考えて
も辰巳には彼女がお似合いだと思っていた。

「違う。ヒカルだ」

「ぶふっ」

だから、晴は大いに噴き出しざるをえなかった。

「え、ヒ、ヒカル！？」

「そんなに意外かよ」

思わず大声を上げてしまった晴を、辰巳はジロツと睨みつける。

「あ、す、すみません。でも、先輩は灯先輩狙いだと思ってたから

……」

意外でして、と弁解する。なんせあの二人は幼なじみなのだ。た
いへんうらやましいことに、ラノベでは定番の、幼なじみなのだ。
まだ付き合ってすらいなことが意外だったりもする。

「ああ、ありや論外だ。ガキのころから一緒にいると女っていうよ
りも兄弟みたいな感じに思えてな」

辰巳が肩をすくめて話したが、晴にはそれがどうも噓っぽくみえ
た。いや、単純に嘘であって欲しいと願っていただけかもしれない。

「で、でも、なんでヒカルなんですか」

見るからに晴は焦っていた。

「なんでだろうなあ。俺にもよくわかんねえよなあ」

対して辰巳はのほほんとしていて、恋の病に完全にやられていた。

「そうですか……。ま、まあ頑張ってください」

晴は諦めて、全然心がこもってない声色とひきつった笑顔で会話を終わらせようとした。

「まあ全部嘘なんだけだな」

そして辰巳が一言。

「え？」

「だから、全部嘘。俺は別にヒカルを好きでもねえしもちろん告白もしねえ」

なんでもないことのように辰巳はこのように告げる。

ポク、ポク、チーン。晴は呆然とした。わけがわからない。一体どういう意図で辰巳はこんなことを……？

「やれっていわれたんだよ」

まるで晴の心を見透かしたように、辰巳は答えた。

「誰にですか？」

さらに尋ねると、

「私だよ」

といって扉の奥から新芽が現れた。

「新芽先輩？」

ますますわけがわからない。新芽は新芽で、狂言告白宣言を辰巳にさせる理由がどこにある？

その答えは新芽の手中にあった。

「先日、こんなものを見つけてな」

ひよい、と新芽が見せつけたものを一瞥して、危うく腰を抜かしそうになった。

「せ、先輩……それは！」

それは……以前煌と天高の主の下で仲良くお昼寝タイムを取って

しまったときの、写真だった。

「まあ、これの真相を突き止めようとしたわけなんだな」

恥ずかしさのあまり熱暴走を起こしかける晴に、新芽は一步踏み出す。

晴がそれを奪おうとすれば彼女はそれを頭上に高々と掲げ、身長差が十センチ近くある晴では届きっこない。

「返してくださいよ！」

「もともと私が撮ったものだ。それよりも実験の結果は実に推測通りだった。セイ、君はヒカルに告白しろ」

「なっ！？　なななななにいつてるんですか！　しませんよ、こ、告白なんて」

「だって好きなんだろう？」

「違います！」

「嘘つけ。辰巳が嘘宣言したときのお前の表情はヤバかったぞ。それはもう、こーんな感じで」

と、新芽は驚きと怒りを入れるだけ入れてみました、みたいな形相をしてみせた。それはもう尋常じゃなくおぞましい。

「してません！」

「してた。覗き見てたこの私がいうんだから間違いない。いいからさっさと告っちまえよ。応援してるからさ」

「あなたの応援ほどあつて困るものはありません」

断固として拒否し続ける。

告白とか、本気でありえない。そんなことできるはずがない。そもそも別に好きとかそういうわけじゃない。たしかに、辰巳が煌に告白するといったときは気に入らなかったが、それとこれは別だ。

「そういえば明日は校外学習だったっけなあー」

なんの脈絡もなく、思い出したように新芽がいった。それから彼女はいやらしく微笑み、晴はハツとした。

「ま、まさか……先輩……」

「さあ、前日にこんな話題を振られたセイ君はどんな心情でこのイ

ベントに臨むつもりなのかなー」

「う、う……」

まさか、こんな裏があったとは。いや、気がつかなかった自分が悪いのか。でもあんな状況で逃げられやしない。

正直、こんな話をしたあとでは煌とまともに顔を合わせることでさえ難しい。それなのに、校外学習は二人きり。天体観測。夜。お泊まり。……こんなにもシチュエーションが揃ってしまっている。ヤバイ。気まずい。気まずすぎる。

「先輩のバカああああ……」

晴はその場に倒れ伏した。最悪だ。この先輩本当悪魔だ。

しかたないから頭の中でお花畑を描いてみる。現実逃避という奴だ。わーい、わーい、うふふふ。待つてよー、待つてたらマイハニー。ああん、追いついてみなさいマイダーリン。……やっている自分が恥ずかしくなった。

「ああ。ちなみに灯を使って同じことをヒカルにしかけたら、返事は『ふーん』で写真を見せたら真っ赤になって逃げた」

「ヒカルにも仕掛けたんかい！」

一発でリアルに呼び戻された。

「しかもヒカルにも君がこういう目に合うだろうということを伝える。さあ校外学習でどうなるか楽しみだなあ」

「そ、そんなあー」

泣きそうになった。どうしてくれるんだこのバカ先輩。死ぬぞマジで。恥ずかしすぎて死ぬぞ。

しかし、その一方でそういう展開を喜んでいる自分もいるみたいで、複雑な気分だな。と、晴は思った。

上級生の校外学習。

清々しいほどに晴れた太陽。押しては返す波打ち際。黄金色一面の砂浜。その中に一輪咲く赤と白のパラソル。陰にたたずむ水着の男女。

辰巳と灯は校外学習と銘打って海水浴に来ていた。

気温的には海開きしても問題はない。ちょっと冷たいかもしれないが、天道島にとってはベストシーズンである。

けれど、やはり平日の真っ昼間から泳ぎたがる海好きなんて稀で、結局のところこの海は二人のプライベートビーチだった。

「それにしても、去年に続いて二年連続で海水浴とはね。芸がないね」

つまらなそうにいいながら、灯は必死にビーチボールに空気を入れていた。なんだかんだわくわくしているのだ。

そんな彼女の格好は、オレンジ柄のトップにボトムはデニム地のショートパンツのようになっていたというセパレーツタイプのスタイル。むき出しの四肢はほっそりとしていて儂げな印象を受けるが、実はあれで結構筋肉がついている。腕相撲で晴に勝てるくらいには「うるせえなあ。楽しいところに何度も行つてなにが悪い」

そして辰巳もやはり水着。黒地で横に白いラインが入った、無骨な水着だ。ますらおぶりな彼にはよく似合っている。裸の上半身は筋肉質で、胸筋、腹筋、背筋、上腕二頭筋と拔かりがない。男子の理想形。

彼もまた、準備体操に励んでいて泳ぐ気満々である。

なにせまともなアミューズメント施設もないこの島では海と山が子どもの遊び場なのだ。内地の若者たちの「今日カラオケ行くー？

それともボーリング？」みたいなノリで「今日海行くー？ それともハイキング？」となる。

「ヒカルとセイ、上手くやってるかな」

何気ない声色で灯はポツリと呟いたが、本当は死ぬほど気にしているということを辰巳は知っている。

「あいつらは星を見るとかいつてたからまだだろ」

まだ太陽は頭上にある。当たり前だがこんな昼間では星なんか見えやしない。

「あの二人、付き合うかな」

「知らねえよ。でもセイはそういうことに関しては抜けてそうだから、まあ付き合ったりはねえだろうな。てかあの二人が付き合うところなんか想像できねえ」

「付き合ったらいいなあ。付き合うべきだよ。こんな小さな島で同じ時期にやってくるなんてマジ奇跡じゃん？ やっぱりこれは付き合うしかないと思わない？」

そんなこといったら、自分と灯は生まれたときからずっと一緒なのだが。

もちろん、いくらバカといえどもそれを口外にするほど辰巳は間抜けではない。

「別に。偶然に見えて実は初めからそうなる予定だったのかもしれないし。そもそもこんなところの出会いなんか大事にしてどうすんだ。内地なんてひとがそれこそ掃いて捨てるくらいいるんだ。中学の修学旅行で見ただろう、渋谷とか新宿とか」

「……辰巳ってたまに意味深なこというよね」

「そうか？ お前はこっち寄りの考えだと思ってたけど」

しばらく待っていたが、灯からの切り返しはなかった。空気入れのポンプを足で踏む音と控えめな波音だけが響く。

しばらくつれづれを体感して。

「時と場合によるかな」

やっと、返事がきた。

「なんか、心の弱そうな答えだな」

「悪かったね」

だが、その灯の貧弱な回答は正鵠を射ていた。彼女の奇妙な立ち位置を。

「つかセイがなんだヒカルがどうだって、お前はいつも他人のことばっかだよな。肝心のお前は……どうなんだよ」

いつてから、失言だったと気づいた。

灯はパンパンに膨らんだビーチボールを抱え、

「よし、空気入れ完了！ ほら、こいよ辰巳。バレーの相手になつてやるぜ！」

貼り付けたような笑顔を辰巳に振りまいたかと思うと波打ち際まで駆けていく。

いつもこうやって、自分のこととなるとやむやしたまま逃げていくのだ。必要以上に踏み込んでこれそうになったら、すぐに壁を張って逃れようとする。

辰巳がその気になれば簡単に壊せてしまえそうな、薄い薄い壁を。火をつけるだけつけて、自分に火の粉が降りかかりそうになれば逃げの一手。

いつもそうだ。辰巳をさんざんと踊らせて、惚れさせて、いざとなったら自分は一步離れて安全圏に逃げ込む。毎度毎度、辰巳は行き場のない恋情を抱え込む。灯は焚き付けておきながらそれを受け止めることを放棄している。

辰巳に好かれていると自覚しながら、理解を拒んでいる。

一体いつまで、こうやって逃げ回るつもりだろう？

灯は気づいていない。

一度火がつけば、あとは火種がなくとも炎は燃え盛るということに。

すでに、炎は灯が煽らずとも自力で燃え上がるほどに達している。この感情はもう止められないのに。

「早くこいよー！」

向こうから灯が叫ぶ。

辰巳は重い腰を上げた。

「ハイハイ。ボッコボコにしてやるから、マジで覚悟しろよ?」

それでも結局は壁を割れず、いつも通り灯のペースに合わせてしまっただ。

彼はフィルター越しに透けて見える灯しか知らない。壁を突き抜けて、その先にある生の灯を見るのが怖い。それを知ったとき、自分と灯の間には今度こそ突破しようのない、高く堅固な壁が生じてしまいそんな気がして。

だからきつと、今のままと望んでいる自分も心の隅にいる。それがまた、辛く悲しい。

防波堤の奥には、海水浴場まで乗ってきた辰巳と灯のバイクが二台、並んで止まっている。

あのバイクのように、二人が寄り添う日はきつと、永遠にこないのだろう。

ムーンサーフェス。

夕方ごろ、煌が家にやってきた。

一応校外学習だし私服が拝めるかな、と少しは期待したが、行く場所が行く場所なのでやはり彼女はいつも通り制服だった。そういう晴も制服だが。

そのまま彼女の原付に乗せてもらい、学校へ向かった。もちろん道交法違反の行為だが、

「バレなきゃいい」

とは煌の談。

都市から船で一日以上離れた島部では法に関していくぶんか寛容であることは灯がバイク免許を持っていることから容易に推測できよう。

それにしても、気まずかった。晴も煌も昨日のことを意識していて、しかも相手も同じ経験をされているとわかつては、これはもうちよっとしたお見合い気分。

原付から落とされないために、煌の腰に触れたらその瞬間ビクツとなつて、煌にしては珍しく「あうう……」と狼狽しているみたいだった。

煌の腰は灯のよりも細った。決して灯が太いというわけではないけど。

そんなこんなで、学校までやってきたころには二人ともいい感じに茹で上がっていた。

晴がちよつとつかみ方を変えるだけで喘ぎ声をあげるものだから晴としても余計変な気分になってしまった。

そんなことはおいといて、二人は早速屋上でセッティングを始め

た。とはいえ望遠鏡と寝袋を屋上に運んだだけなのだが。

用意が全部終わると、あとは太陽が沈むのを待つだけとなる。この時間が一番苦痛だった。話すことがない。その上、気まずい。心から、新芽は余計なことをしてくれたと思う。

なにか話さなければ、なにか話さなければ……

「ヒカルっ」

「あの」

……………。

見事にタイミングが被ってしまい、晴と煌はまた黙り込む。

「先、いつていいよ」

「そっちこそ」

……………。

なんなんだろう、この空気。まこと恐るべし、新芽マジック。

「……今日はなに見るの？」

いくら待っても煌から話し出す兆しが見えなかったので、晴から開口する。

「月」

簡潔に煌は答えた。それから、

「今日はセイが初めてだから、簡単な奴にする」
付け加える。

その間、晴はぼかんとしていた。『月』という単語の響きが『好き』みたいに聞こえたのは単純に晴が思春期初級編であるからだろう。

「そっか」

会話終了。って待て待て。こっからさらに広げていかなければ。

「そ、そっだ、望遠鏡で太陽覗いたらどう見えるかな？」

「ダメ」

「ぶっ」

太陽に望遠鏡を向けて覗こうとした晴だったが、煌に顔面をわしづかみにされてとどまらされた。

「望遠鏡で太陽を見たら、ダメ。目が焼けてしまうから」

「そ、そうなんだ？」

「虫めがねで紙が焼けるのと同じ。月でさえ、満月のときはムーングラスを付けなければいけないのだから。まあ今日は半月だから大丈夫だけど」

「へ、へー」

晴にはよくわからなかったが、どうやらそういうことらしい。

「じゃあ夜までまつしかないか」

「うん」

「暇だね」

「うん」

……、と、晴の努力も虚しく沈黙が二人を包む。

「じゃ、じゃあライトノベルの話をしようか。てかこの島って物流なさすぎてよほどメジャーなのしか置いてなくて大変なんだよね……」

……

「その話はいい」

「そうか……ごめん」

その後晴と煌は完全に無言で夜を待ったという。

「と、いうわけで、夜になったね」

時刻は八時。太陽は完全に沈み、今や紺碧のじゅうたんとなった空にいくつも散りばめられたような星が瞬いている。

「こうやって改めて見上げると……本当にすごいよね」

どこもかしこも、星星星。この空は街灯だらけの東京では決して見ることができない光景だ。

「うん……素敵」

煌も晴と同様に、星の輝きに圧倒されて開いた口が閉まらないみたいだ。

「あ、あの星すごい光ってる」

晴が空の一点を指差すと、
「どれ？」

煌が寄り添って指を追う。

「ほら、あそこだよ」

なおも示すと、煌は理解して、

「あれはアークトゥルス」

「そういう名前なの？」

「うん。アークトゥルスはうしかい座のβ星で、春に見える星の中では一番輝きが強い」

「そうなんだ？ よく知ってるね」

「アークトゥルスは、有名」

「嘘？ 僕、アークトゥルスもうしかい座も初めて聞いたんだけど」
「それはセイが無知なだけ」

煌はおかしそうにクスクス笑った。

それを見て、晴は目を疑った。あの煌が笑ったのだ。珍しい。新芽が跪くと同じくらい珍しい。

しかも、気づけばさっきまでずっと続いてきた気まずさも払拭されたようだ。星の力は偉大だ。

「あれなら知ってるよ。おひつじ座」

名誉挽回と晴は必死になって夜空を見回すが、

「ない。おひつじ座は秋の星座」

「え、だっておひつじ座って四月の星座じゃないの？」

「それは誕生日とかの方。春の黄道十二星座はあそこにあるかに座と、あつちのしし座と、それからそこに見えるおとめ座」

三つそれぞれ丁寧に指示してくれるが、天体初心者の晴にはわからない。

「えっと……どれ？」

「むー。どうせそんなところだろうと思って星座早見持ってきた」
あるなら先にいえよ。

とにもかくにも、星座早見というスペシャルアイテムのおかげで

三つの星座を判別することができた。

「なるほどねえ。どう見てもカニやライオンや乙女には見えないけど」

「気にしない。それで、しし座のデネボラとおとめ座のスピカ。それからさつきいったうしかい座のアークトウルスを結びとできるのが、春の大三角」

「へー、夏と冬だけじゃなくて春にもあるんだ、大三角って」

「秋にはないけど」

「秋だけかわいそうだな」

たしか、秋は夜空が一番乏しい季節だと聞いたことがある。

星座早見をよく見ると、しし座はデネボラよりレグルスの方が明るかった。輝きよりも形を取ったのだろう。

ここまでの会話が、なんだか理解の教科書に載っている先生と生徒の会話みたいで晴はなんだかおもしろかった。

「それじゃ、そろそろこいつ使う？」

晴は煌が持参した望遠鏡を優しく撫でながら尋ねた。

「そうね」

煌は早速用意を始める。

「あの、しし座とかは見ないの？」

「ああいうのは難しいから。初心者には月とか惑星から始めるのがベスト」

それからは、煌は望遠鏡の用意に集中してしまい、晴は一人黙って完成を待つこととなった。最初は手伝ってやろうと思ったが、フアインダーの十字線を……とか、低倍率のアイピースを……とか煌が難しそうなことをいうので断念した。

最後に煌が試しに覗いてみて、

「はい、できた」

望遠鏡のセッティングが終わった。

「覗いてみて」

促されるまま、晴は割れ物に触れる手つきで望遠鏡を覗き込んだ。

「……………すつこ」

目の前に、月があつた。

半分だったので、半分の面は陰になっていた。それでも月面はよく見える。クレーターなどが間近から見え、まるでアポロ十一号の乗組員になった気分になる。初めて月面に降り立った宇宙飛行士の感動を生で体感して胸が躍った。

届くわけないとわかつているのに、手を伸ばせば月に触れられそうで、結局晴の右手はただ宙を搔く。それを見て、煌は思わず笑みを溢していたが、月に夢中な晴には気づくよしもない。

「……………どう？」

望遠鏡から目を離すと、煌が尋ねた。

「すごい。なんかもうただただすごすぎて圧倒されたよ。月が目の前にあるみたいだった」

熱っぽく晴は答える。それから煌に望遠鏡を譲った。

煌はノートと鉛筆を取り出し、懐中電灯を口にくわえて観測した月のスケッチをしようとするが、

「僕が持つよ」

晴が懐中電灯でノートを照らす役を申し出た。

「ありがとう」

煌もそれを甘んじて受け入れた。

それからどれくらい経っただろうか。一時間か、二時間か、懐中電灯を持つ役でしかない身には時間の流れをやけにゆっくりと感じる。

うとうとし始めて、晴はごしごし目を擦って覚ます。

「眠かったら寝て」

望遠鏡とノートから目を離さずに、煌はいつもの無機質な声色で提言した。

「大丈夫」

晴は首を振り、照らし続ける。

「っていつかさ、今日これ終わったあとってやっぱり……」
「ここに泊まる」

煌は淡々と告げた。

まあそんなところだろうとは薄々感じていたが。寝袋まで用意してあるし。

でも、よく考えたらそれってとてつもないことだよなあ……と、晴は思う。

「山の夜道は暗い。危険」

と煌はきっぱり宣言しているが、やはり晴は男子として見られていないようだ。

ふと煌のスケッチを垣間見ると、微に入り細に入り描写されていた月もほとんど完成している。もうすぐで終わるだろう。

晴にとつて、ある意味特別な夜が更けていく。耳鳴りが痛い無音の中、鉛筆の音だけが一定のリズムを刻みつつ静かに鼓膜をくすぐり、まぶたが抵抗もむなしくうつらうつらと降りてくる。

夜空の奥では、アークトウルの何光年も遠くの煌めきがひときわ輝いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9833v/>

アワプレイス

2011年11月13日03時10分発行